一九五三年、市民学校のユルゲン・ペトヒャーのクラスで美術史や絵画の基礎を学ぶ。

静物画からピカソまで

夜はペトヒャーの家でジャズを聴き、互いの作品を持ち寄り、密輸した美術書をめくり、友情を育む。

※ 後にペトヒャーは映画監督となる。数々を題材に「ある教師の中の3人(Drei von Vielen)」(1961年)撮影。上映禁止になる。

一九五四年、初めての木版画を制作、肖像画を描き販売し始める。

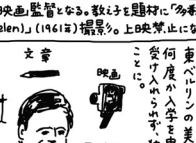
一九五五年、VEB DEWAG(人民公社ドイツ広告代理店)で製紙固工の見習いとして職業訓練を受ける。

初めて出ぶした展覧会は一九五六年にドレスデンで開催された初心者と職業訓練校の学生を対象としたコンクールで家族と街を描いた木版画で入賞。展覧会は東ベルリンへ巡回したが、ディングラフの作品は、プロジョ的退廃であるとの展示を拒まれる。

つまらないキッチュな作品ばかりだ

政治的な意図や擁作に気付き、国家に敵対心を抱くようになる。

見習いを辞め、ドレスデンや東ベルリンの美術学校に何度か入学を申し込むが、受け入れられず、独学することに。



一九五六年、ゲオルク・ケルン(ベゼリッツ)と知り会う。翌年、ケルンは西ドイツへ移住。

文通により、ジャクソン・ポロック、アントナン・アルトーヴォルスなど西側の文化を知る。

ポロックって人の名前だったのか…。

一九五〇年代後半、ピカソ、レンブラントの作品を参照した作品を集中的に制作。東ドイツでは、ピカソはいかがわしい画家とみなされていた。

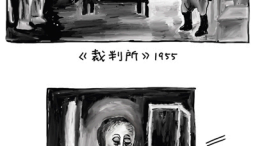
なんとも言えない表情

《帽子をかぶった自画像》1958

孤独や暴力を描く自象的な絵画も。

《キュビズム的素描》1960

裁判所? 拷問?



《裁判所》1955

光と影の対比

《暗い窓のそばの婦人》1957

ゴッホの《じゃがいもを食べる人々》からの影響

《食卓の男と女》1959頃